欧州からニッポンを見る ―――― vol.364

互いに相手に敬意を払う姿勢こそ外国人同化の鍵を握る

在仏コラムニスト　安部 雅延

フランスの外国人比率は日本の３倍強

ポピュリズムは、その時高まる感情を利用して物事を動かすことが多い。感情はその時々に移り変わるものなので、ポピュリズムは理性的でないとして軽蔑される場合が多い。日本は今、過去にない外国人排斥の動きを高め参政党が票を集めている。

最新の統計では、人口に占める在留外国人の数は３・21％で過去最高を記録した。フランスは11％を超えていることからすれば、大した比率でもないが、フランスの非ヨーロッパ系移民の歴史は古い。19世紀から始まり、本格的に急増したのは１９５０年代以降の高度経済成長期で、いずれも産業の底辺を支えた。

彼らの多くはフランスに住みつき、今ではアラブ系移民だけで11％を超えると推定される。フランスでは人種や宗教で人口統計を取ることは避けられているので、正確な数字は不明だが、11％の中にはフランスに帰化したアラブ系移民も含まれる。さらにユダヤ系50万人、ヨーロッパ系も少なくない。

フランスの移民問題は19世紀に多かったイタリア、スペイン、ポルトガル移民、そこに北アフリカのマグレブ諸国からの移民だけでなく、レバノンなど中東からの移民もいる。イタリア人・ポーランド人・スペイン人・ポルトガル人なども、過去には「犯罪」「暴力」「ストライキ」「治安悪化」のイメージで語られた。

彼らは今はトラブルは少ないが、新参者が馴染むには１００年は掛かると見られる。ただ、ヨーロッパ系はキリスト教を共有し、親和性もあったが、アラブ系にはそれがない。過去の歴史もキリスト教とイスラム教の戦いは熾烈だ。両者とも一神教で神の約束を信じ、認識は永遠に一致しそうにない。

最近の深刻なトラブルは麻薬密売をめぐるアラブ系移民が引き起こす暴力事件で、専門家によるとアラブ系のギャングループ同士の抗争は、対立する仲間同士の報復合戦が「予告殺人」のレベルに引き上げられ、警察当局はイタリア・マフィア型の抗争に突入したと見ている。

また、２０１５年11月にパリのバタクラン劇場で戦後最悪のテロが起きて10年が経つが、フランスのイスラム過激派は、フランス一般国民とムスリムを分ける分離主義を打ち出し、当局は警戒を強めている。クリスマスから新年にかけて、大規模テロが実行される可能性も高まっている。

筆者のアラブ系移民家族への取材では「われわれをフランスに同化させようなんて無理な話だ」と口を揃えて言う。だが、フランス政府は「同化政策の推進」の姿勢を崩しておらず、移民犯罪者の滞在許可証はく奪など、移民へのハードルを上げている。

戦争や紛争、貧困などで人々が自分の生まれ育った国にいられないだけでなく、より良い暮らしを求め、新天地を求めて国をまたいで移動する経済難民も増えている。日本では、直近の参院選で移民排斥を主張する参政党が票を伸ばしたことを受け、内閣府内に設けられた「外国人との秩序ある共生社会推進室」がスタートした。

気になるのは、フランスの移民問題が社会を不安定化させていることを例にとり、日本をフランスのようにするなという意見が散見されることだ。30年以上、自らもフランスに住み、国の最重要政治課題である移民問題と失業問題を取材してきた立場から、日本が

安易に深い理解なしに、フランスの例を引用することに複雑な思いがある。

同化しない分の法律の適応

結論から言えば、外国人の同化政策の成功例は世界のどこにも存在しない。例えば、人種のるつぼと言われた米国でも移民問題は解決していない。多文化共生主義をとる米国、カナダ、オーストラリアは歴史が浅いので、国が定めたルールを守れば、国民として認められるが、人種間の対立は起き続けている。

ましてや米国のような自由、平等、公正、正義という明確な国家理念から出発しているわけでもない日本のような、長い歴史に育まれた価値観が存在する国の多文化共生は始まったばかりだ。日本人は、在日韓国人や中国人が何を感じて日本で生活しているかなど関心を持ったことはない。誰もが客観的に外国に向かって日本を説明できる国でもない。

外国人が増えれば、国がとんでもないことになると警告する人たちは、島国の超ハイコンテクスト文化の自覚がない。なおかつ、外国人比率は、先進国で最も低い部類に属する日本に急増する外国人によって、日本が日本でなくなる可能性はない。それより、日本人の了見の狭い排他的で、内と外を区別する風潮に問題がある。

興味深いのは、国境を越えて存在する宗教に基づく外国人の共存の日本の動向だ。たとえばカトリック教会は、日本人信者約43万人に対して、在留外国人信者は約50万人という数字もある。内訳で多いのはフィリピン、ブラジル、ペルーだそうだが、神のもとに兄弟というキリスト教の精神もあるが、別のコミュニティを作っている。

修道院でも外国人が増え、神父など聖職者も増えている。中国やベトナムからの場合、中央政府の弾圧を逃れて日本に住むケースもあるという。日本で住む地域も集中しており、生活圏も自分たちのコミュニティを作っているケースが多い。

日本の教会内で国籍、人種、民族を理由とする対立が表面化したことはめったにない一方、日本人は自分の感情や考えを表に出さないことで誤解を招いたり、埋められない溝ができる場合もないとはいえない。無関心だったり、結果として違和感からネガティブ感情が生まれれば、何か予期せぬことが起きるかもしれない。

私は約10年前、パリの南郊外にあるフランスで2番目に大きいモスクを訪れ、有名な教区長にインタビューしたことがある。彼は私に、世界最大のイスラム教国インドネシアを訪問した時の印象を話してくれた。彼は、自分が知るイスラム教とインドネシアのイスラム教の違いに驚かされたと話した。つまり、同じ宗教でさえ違いがある、

旧ソ連の社会主義と東ドイツの社会主義、中国の社会主義、北朝鮮の社会主義は、同じイデオロギーにあっても全く違う。国境を超えるはずの宗教や、イデオロギーも、文化の壁を超えるのは容易でない。

例えば、フランス以上に英国は多民族国家、多文化共存の米国をめざしているが、結局、欧州大陸から流れ込んだ白人移民でさえ、違和感を覚え、欧州連合（EU）を離脱した。それにイングランド、ウェールズ、スコットランドの白人比率は80～90％強、有色人種のメーガン妃が差別されたのも当然だ。

人種、宗教、イデオロギー以外では、これは一神教の価値観と密接に繋がっているが、普遍性を持つ価値観のぶつかり合いもある。さらに西洋世界で聞かれるのは文明度の問題だ。例えばフランス人からよく聞かれるのは「文明の度合いが低いのは受け入れがたい」という批判で、最近では日本でも隣国に対して同じ言説が聞かれる。

異文化理解の基本は、相手に敬意を払うことから始まる。例えば、法律は破るためにあるとか、嘘は生きる方便、時間を守らない、社会ルール、特に公共心の欠如は文明が低い証拠という具合だ。基本的に日本以外の国は多文化社会をすでに抱えている。人口の9割以上が同じ人種や民族、同じ言語を話す国は、世界にほとんどない。